

◇ 談話会講演要旨 ◇

ミュンヘン，ウプサラとその周辺の地理

式 正 英

1972年3月から5月，西ドイツ，ミュンヘン大学に，同年5月から7月，スウェーデン，ウプサラ大学に滞在し，夫々の付近の地域に地理学的観察を行う機会を得た。

ミュンヘンの旧市街地はイザール川右岸に位置し，ヴィルム氷期の平坦なアウトウオッシュ扇状地上にある。付近は氷期，アルプス山地より北に押し出した山麓氷河の末端部にあたり，その堆積地形が支配的である。西に隣るレヒ川，イラー川の流域はA.ベントがギュント，ミンデル，リス，ヴィルムの4氷期を類別した基準地であり，氷期の名称はこの地域の小河川の名前から採った。ヴィルム氷期は末端堆石堤とアウトウオッシュ，リス氷期は前者の外縁部に削剝をうけた末端堆石堤として，夫々原地形を残している。ミンデル，ギュント氷期の痕跡は，氷成礫から成る丘陵として点在する形であり，丘頂部の地形面はギュントがミンデルより相対的に高い。ギュント以前として論議されているドナウ氷期，バイベル氷期の証拠はギュント礫層下の地層の解釈で，地形ではない。アウトウオッシュ堆積物は，アルプスの構成岩石が石灰質に富むため，堆積後も礫層中の滲透水によって固結される傾向がある。この様な固結礫層をナーゲルフルーと呼び，固結度の大きいもの程，古い氷期の産物と解釈されている。これら礫層の露出する崖には鐘乳石も認められる。

フォルアルベンはアルプスの前山にあたり，海拔1,500mほどの山地であるが，氷期の氷食地形遺物が明瞭で，中央日本の高山地に類似した景観を呈し，日本の氷河問題を解くフィールドとして役立つように思われる。

ウプサラ平野はヴィルム氷期のフェノスカンジヤ氷床によって削剝された氷食準平原を基調とし，ボスニア湾中央部へと縮少をつまけた氷床が，付近で解氷すると同時に侵入した海の影響をもうけている。即ち氷食によって生じた基盤の節理などに沿う凹部には，海成粘土層が堆積し，肥沃な低地となる。相対的に凸部は瘤状岩のゆるやかな丘陵地で，堆石が散在している。更に解氷期の氷床下に形成されたエスカーは，比高20～30mの砂礫から成る堤防状地形で，平野を横切って南北に数条が分布している。

ウブサラ付近は解氷が8,500年前、海侵から次第に陸化した部分は5,000年位前から現在にいたり(アイソスタシーによる隆起はなお年1cm弱の割で続いている)、全体が新しく生じた土地である。ミュンヘン付近は氷河末端部であるから、ヴィルムの極盛期直後(約2万年前)に解氷された。即ち両者は氷河地形ではあるが土地の生成に於いて新旧の相異がある。

メキシコにおける都市化

栗原尚子

第二次世界大戦後の低開発諸国において、都市人口の爆発的増加は、“都市化”の理論の再構築という視点から都市地理学の分野からも様々に取り扱われてきた。本報告では、それを生み出す構造を“低開発性”との関連で考察することを目的とした。

低開発国とくにラテンアメリカの国での都市人口の爆発的増加は、高い出生率に加えて農村から流入人口が大きな割合を占めている。メキシコ市においても同様で、従って雇用問題として農業構造とくに土地制度との関連から農村のPush factorの問題と、メキシコ市のPull factorとしての工業の集積などメキシコ市の性格を明らかにする視点からメキシコ市の都市化を考察した。メキシコ市の最卓越性(Primacia)は、1940年以降、10万人以上の都市の成長がめざましいにもかかわらず、メキシコの都市の階層性を考える際には最も重要である。1940年以降のメキシコ市の都市化は、年率5%の高率で進み(自然増加率は平均年率3%)、それ以前の時期と一線を画している。このような高率な人口増加の一因は農村からの流入人口に依っており、その農民の出身地は、メキシコ州をはじめとするメキシコ市周辺の伝統的農業の卓越する中央地帯が70%近くを占めている。これらの農村には、零細農や土地なき農民が潜在失業状態で滞留している。1940年以降のメキシコの近代化、産業化に伴ってメキシコ市の雇用機会の増大とともにこれらの農民は、よりよき生活を求めてメキシコ市に流入した。さらにメキシコ市のPull factorとしての性格には、工業の集積、植民地体制の遺構としての政治・行政部門の中央集権的体制や、商業機能などの独占的性格が加えられ、メキシコ市の都市化を特徴づけている。都市化によって生み出される問題には、マージナル階層の増加、スラムの拡大などメキシコの発展から取りのこされた部分の拡大、国内における南北問題の都市における問題として深刻さを増している。